

モナド論の〈非神学的解釈〉  
——ライプニッツの無限論を軸に

丸山諒士

# 目次

0.0. 序——本論の視座の共有のために	5
0.1. 「モナド論」という語の使用について、及び動機	9
0.2. 神と人間との距離——本論の目的、方法	12
0.3. ライプニッツと近代——本論の思想史的意義、背景	16
0.4. ライプニッツと近現代の技術——本論の現代的意義	20
0.5. 本論の構成	27
1.0. ライプニッツの無限論及び人間の有限性	31
1.0.1. 「無限のさなか人間とは何か？」	33
1.1. ライプニッツにおける数学上の無限	42
1.1.1. 無限数や最大数が拒否される根拠	43
1.1.2. 「単なる無限」、「無限なるもの」、「シンカテゴレマティックな無限」	45
1.1.3. 数学上の無限の大小は有益な虚構である	49
1.2. ライプニッツ哲学において何が現実的に無限か	51
1.2.1. シンカテゴレマティックな現実的無限	52
1.2.2. 現実的に無限に多くあるもの	57
A. 数学における現実的無限	58
B. 自然学的な領域における現実的無限	58
C. 厳密に形而上学的な領域における現実的無限	62
D. 完足個体概念や偶然的真理に関わる現実的無限	65
1.3. シンカテゴレマティックな現実的無限の再解釈	66
1.3.1. アーサー解釈の疑問点	66
1.3.2. シンカテゴレマティックで異質な現実的無限	68
1.4. 現実的無限と人間の有限性との関係の解釈	73
1.4.1. 神学的解釈——どこまでも神の知性に向けて進歩する	76
1.4.2. 非神学的解釈——どこまで進んでも神まで無限に遠い	82
1.5. まとめ及び2章へ向けて	87
2.0. ライプニッツ哲学における無限と偶然性	92
2.1. 様々な偶然性擁護理論	93
A. 世界外在的な偶然性の擁護——1672年頃から晩年まで一貫	97
B. 世界内在的な偶然性問題への気付き——1686春-秋頃	107
C. 世界内在的な偶然性の擁護（無限分析説）——1686-9年を中心に	116

2.2.	様々な偶然性擁護理論の関係	125
2.2.1.	諸理論統合の困難	126
2.2.2.	無限分析説の再検討	133
2.2.3.	二重の偶然性	140
2.3.	二重の偶然性の解釈	141
2.3.1.	〈神学的解釈〉——世界外在的な偶然性への一本化	142
2.3.2.	〈非神学的解釈〉——偶然性の二重性の維持	147
2.4.	まとめ及び3章へ向けて	151
3.0.	ライプニッツ哲学における無限と最善世界の最善性	154
3.1.	比喩表現への着目—— <i>ouvrage</i> としての世界の完全性	156
3.1.1.	神の作品としての世界の「よさ」	157
3.1.2.	神の仕事としての世界の「よさ」	159
3.2.	比喩表現の整理と相互関係	160
3.2.1.	比喩の区分	161
A.	芸術の比喩	161
B.	幾何学の比喩	161
C.	エコノミーの比喩	163
D.	君主と臣民／父と子の比喩	167
3.2.2.	比喩表現の効果と限界——美を鑑賞する神というアポリア	168
3.3.	アポリアの解釈	170
3.3.1.	〈神学的解釈〉——芸術の比喩の幾何学の比喩への還元	170
3.3.2.	〈非神学的解釈〉——芸術の比喩を維持する	175
3.4.	まとめ	180
4.0.	モナド論の〈神学的解釈〉と〈非神学的解釈〉	183
4.1.	〈神学的解釈〉のまとめ	184
A.	1章を受けて——同質性の神人同型性	184
B.	2章を受けて——規則性の神人同型性	185
C.	3章を受けて——全体性の神人同型性	186
4.2.	〈非神学的解釈〉への凡その道筋——フォイエルバッハの諸思想をヒントに	186
4.3.	〈非神学的解釈〉の構築	194
4.3.1.	演じ手＝解釈者としての人間——実演の比喩を通しての各章の総括	195
4.3.2.	〈非神学的解釈〉が有する〈神学的解釈〉への危惧	201
4.3.3.	〈非神学的解釈〉の現代的意義——分断と画一化から多様化と連帯へ	208
A.	種の同定と普遍学の形成——ライプニッツの楽観	208

B. 分断と画一化——〈神学的解釈〉における計算的理性の暴走.....	211
C. 多様化と連帯——〈非神学的解釈〉による分断と画一化の転倒.....	214
4.4. まとめ .....	217
5.0 終章 .....	219
参考文献等 .....	221

## 論文の要約

本論の目的は、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツのモナド論を根源的に多元論的な哲学として解釈することである。この試みによって、近代合理主義の黎明期に位置する彼の哲学から、現代文明が抱える様々な諸問題を根本から考察する視座の獲得を目指す。一般的に言ってライプニッツの哲学は現代文明を支える合理主義に連なるような思想であり、20世紀以降絶えず批判されてきた数学・自然科学をモデルとした一元論的な哲学的思考に近しいと考えられる。本論では従来の多くのライプニッツ研究において、このような一元論的な哲学としてのライプニッツ解釈が行われてきたことを示しつつ、その整合的解釈の背景にどのような前提が潜んでいるかを明らかにする。そしてこの前提からの逆照射によって本多元論的哲学としてのライプニッツ解釈を完成させる。

従って本論は、モナド論に関する二つの解釈を両論併記するというスタイルを採った。この二つが論文題目にもある〈神学的解釈〉と〈非神学的解釈〉である。前者はライプニッツ哲学の神の下の予定調和に代表される一元論的傾向を直截に受容する穏当な解釈である。この解釈は、「人間は他の被造物に比して絶対的に優勢に神に似ている」という神人同型性の神学的前提によって成り立つために、こう呼称する。対して〈非神学的解釈〉は、この神学的前提を敢えて疑義しつつ、本論が独自の観点から為す解釈である。本論では一貫して、〈神学的解釈〉においてはモナド論を近現代の合理主義に連なるような思想として捉え、〈非神学的解釈〉においてはこれを新たな多元論的な哲学として捉えた。

本論が両論併記する二つの解釈の軸となるのが、ライプニッツの無限論の解釈である。というのも、一方で彼の無限論はその哲学に力強く一元論的傾向を持たせるが、他方で多元論的な傾向も持たせ得るからだ。例えばライプニッツは自身の微積分学の成果から、生成消滅する雑多で混乱した諸現象を、無限に微細に分析し、秩序立てて認識する方途に着想した。この点で、彼の無限論は一元論的哲学を推す。だが不安定な現象を単一の永遠の實在に還元する種の哲学と異なり、ライプニッツのモナド論は「単一なもの（モナド）」の實在における無限の「多」にこそ要点がある。この点で彼の無限論には多元論的哲学を見出す余地がある。

本論の構成は序章（0章）と1-5章より成る。本論の序章では、論文全体を以て示すべき以上の主旨と見立てを概略的に予示し、加えて筆者の現代文明に関する問題意識の明確化とライプニッツの哲学が持つ現代的意義の提示を狙いとして、現代哲学の技術論を参照した。ここではあらゆる学知の計量化を人間の「画一化」と呼び、そしてこの「画一化」にもかかわらず学知の専門分化や価値観の複雑化の進む現状を人間の「分断」と呼んだ。続く1-3章ではそれぞれ別個のトピックについて検討した。そしてそれぞれのトピックに見出される解釈上の困難に対し、〈神学的解釈〉による解決と〈非神学的解釈〉による解決とを各章末節に併記した。4章では1-3章の成果から〈神学的解釈〉の特徴をまとめて示し、その上で本論の目的である〈非神学的解釈〉の構築に取り組んだ。5章は各章に関する総括である。

以下に 1-3 章のテーマ、そこに見出される難題、難題に対する二つの解釈による取り組み方を示す。

1 章では本論の軸となるライプニッツ哲学における無限論を扱った。とりわけ複数の研究者によって用いられる「シンカテゴレマティックな現実的無限」という語に関する論争を検討した。ライプニッツは「シンカテゴレマティックな無限」を真なる概念として認めるが、これを基本的に観念的な数学的領域においてのみ用いるため、自然学的な領域や形而上学的領域において認められる「現実的無限」とこの無限との関係について解釈が別れている。本論では数学上の無限の性質を引き継いだ「シンカテゴレマティックな現実的無限」が、そのまま別の領域にも適用されるとするリチャード・アーサーの解釈に着目した。この解釈の主要な特徴は数学・自然学・形而上学いずれの領域における多さにも「順序付け」乃至「数の割り当て」を認めることである。しかし通常順序付けには対象の同質化、一元化が伴うのに対し、諸モナドは相互に異質であるという難題がある。アーサーはこの難題に自覚的ではなかったが、彼の解釈がこの難題を回避するためには、各モナドがその表象の判明さの度合いという尺度において同質であり、故に各モナドは神の完全に判明な表象を頂点に単線的に順序付けられ得ると捉える必要があること、従ってアーサー解釈は〈神学的解釈〉であることを指摘した。対して本論では、モナドの相互異質性やライプニッツがモナドの多さは量の範疇にないと述べることから、諸モナドの判明度順による単線的ヒエラルキーを認めず、むしろ神と諸モナドとは非連続であり、かつ諸モナド同士の関係は複線的なネットワークにおいて非一元的に秩序付けられているとする〈非神学的解釈〉を提出した。この際の諸モナドの「現実的無限」を数え上げ不可能な多さとして特別に〈異質的無限〉と呼んだ。

2 章ではライプニッツ哲学における偶然性を無限との関係から取り扱った。彼は絶対的必然主義的哲学と対立し、この世の事象の偶然性を擁護しようとした。その方法は様々であるが、本論では特に偶然的命題の無限分析によって偶然性を説明する方法（「無限分析説」と呼ぶ）を重要視した。しかし従来の解釈では、神の自由意志や他の可能世界によって偶然性を説明する世界外在的な偶然性擁護理論が中心的に扱われており、あくまで世界内在的な分析に終始する無限分析説は軽視されがちである。本論では二つの理論は互いを必要としないが排斥もしない関係にあることを明示し、故にライプニッツの体系においては一つの事象が二重に偶然的だと説明されているという難題のあることを指摘した。その上でこの偶然性の二重性に対して〈神学的解釈〉と〈非神学的解釈〉を提示した。前者では、ある事象の分析や理由探求の無限性それ自体がその偶然性を基礎付けることはないが、その無限の分析過程が我々に見せる系列、及び系列におぼろげながら見出される規則性に重点が置かれる。具体的には、我々は収束無限級数の計算において、級数の規則性に依拠して等差を与え (reddere rationem)、求められる解との誤差を縮めるが、これと同様にして、偶然的命題においても見出される規則性に依拠して理由を与え (reddere rationem)、神が知るような仕方でも偶然的な事象をよりよく理解するのである。この時、神のみぞ知る世界の一般的法則と我々

の知る数学的法則が同様のものとして前提されているために、この種の解釈は〈神学的解釈〉とみなせる。対して〈非神学的解釈〉は事象の分析や理由探求の無限性そのものが偶然性を基礎付けると捉える。何故なら、分析や理由探求が無限に終わらないということは、所与の事象の反対の可能をいつまでも保持するからである。

3章ではライプニッツ哲学における最善世界の最善性を扱った。そのために本論では彼が最善性の様態を語る際に積極的に用いる比喻の分析を行った。彼は世界のよさを芸術作品の美のように、そして神の世界創造の巧みさを幾何学者や建築士、職人などの仕事の巧みさに喩える。3章で難題となるのは、世界を芸術作品のように表現する比喻は、「美を感じる神」というアポリアを生むことである。この難題に対して〈神学的解釈〉は、不完全な表象が混じって成立する感性的認識としての美は神に無関係であると直截に結論する。この場合、まるで音楽の美が楽譜の数学的秩序に還元されるかのように、世界のよさや神の創造行為の巧みさが専ら量的な基準へと還元されることになる。またライプニッツは、最単純な法則による最豊饒な世界の創造という自身の最善観を、最大の費用対効果を持つエコノミーのよさとしても喩える。故に〈神学的解釈〉は現代の経済的合理性にも親和性を持つ。対して〈非神学的解釈〉では、諸モナドの〈異質的無限〉の重視と、ライプニッツ哲学における美の認識に知的認識へと還元されないような独特の意義を見出すことで、世界は神にとっても何らかの仕方で美しいのだと捉えた。

4章では以上の成果からモナド論の〈神学的解釈〉の特徴をまとめ、〈非神学的解釈〉を構築した。〈神学的解釈〉では、神と連続した諸モナドの単線的ヒエラルキーから成る世界を前提に、人間は現象に見出す規則性によるこの世界への絶対的で一元的な神のような知的把握を——まるで音楽から楽譜の数学的秩序を求めるかのようにして——求める。これは数学・自然科学的手法が学知において支配的な現代の人間知性の画一的状況に即応する。本論は、このように人間知性を神の知性の欠如的類似とみなす思想潮流をいち早く批判したフォイエールバッハが、ライプニッツ哲学をこの潮流の過渡期に位置付けたことに注目し、彼の批判点への応答を経由して、〈非神学的解釈〉の構築に着手するという手順を取った。彼の批判点は、モナド論における他者、或いは無媒介な具体の不在である。言い換えれば、神以外の有限知性は、直接的対象を一切持たず、不完全なる表象に漂う幽霊のような媒介を通してのみ他者を外から観るだけだと言う。本論ではこの意味での他者不在を甘受しつつ、しかし〈非神学的解釈〉を介せば、こうした性質を神の知性に比しての欠如とみなすことにはならないと結論した。何故なら、いかなるモナド及びその表象も単線的な優劣関係にはない〈非神学的解釈〉において、たとえ表象対象がその混雑さ故に常に媒介的であるとしても尚、その媒介的対象は絶対的知的把握を目指して克服されるべき単なる幽霊ではなく、むしろ——諸モナドの複線的ネットワーク故に、どんな把握も他の把握を劣位に置くことがないほどに——根源的に多元的な「解釈」を我々に開く積極性を有するからだ。

こうした〈非神学的解釈〉においては、或る個体はそのどんな性質を失ってもそのもので

はなくなるという超本質主義が帰結する。もちろん人間はその無限の本質を一挙に汲み尽くすことは出来ないため、有限な知的把握は対象へのある種の暴力を伴う。〈神学的解釈〉を通したモナド論の危険性は、この暴力を神のような絶対的把握のための必要過程（例えば数量化）として肯定しかねない点にある。対して本論の打ち立てる〈非神学的解釈〉は、知的把握を逃れ、無限に現れる不分明で異質な「多」のいずれをも切り捨てずに尊重しようとする。これによってモナド論から派生し得る人間知性の「画一化」は、多様な人間知性の「連帯」へと転回し得るのである。これが本論の示すモナド論の現代的意義の礎である。